

日中間のインターネット合同授業  
—北京大学日本語コースとICU中国語コースの試み—  
Video Conferencing Joint Class: Beijing University Japanese Course and  
ICU Chinese Course  
鈴木庸子 国際基督教大学  
Yoko Suzuki, International Christian University

北京大学日本語コースとICU (International Christian University, 国際基督教大学) 中国語コースの間で、ビデオ会議システムを利用した合同の会話授業を行った。学生は、それぞれの学習言語による自己紹介と大学紹介、相手校の学生に対する質問をし、自国語で相手の質問に回答した。参加者は日本語の学生13名、中国語の学生8名とそれぞれの担当教員である。中国語コースでは約1ヶ月にわたって準備をし、会話授業の参加と成果はコースの成績に組み入れられた。この会話授業の成果は、学生の学習動機付けが高まりスピーチとしての完成度が高かったこと、中国人、日本人学生の直接対話の機会を持つことができ、お互いによい刺激を受けたこと、お互いの理解を深めることができたこと、中国語の会話授業に対するインパクトがあったことである。

キーワード：ビデオ会議 中国語教育 日本語教育 国際理解教育 会話授業

### はじめに

ICUでは、JICUF(Japan International Christian University Foundation)の助成金を得て、世界各国の大学とビデオ会議による合同授業を試みている。本稿では、その試みの中で語学授業の一環として中国語の授業一コマ70分を、北京大学の日本語コースと合同で行ったので、その授業内容、成果について報告する。

### ビデオ会議の目的と授業の実際

今回のビデオ会議は、日本側と中国語側の2大学における、それぞれの第二外国語の授業を合同で行うという主旨のものである。ビデオ会議の目的は、遠距離にある2校を情報技術を利用して結び、それぞれの大学生同士が直接対面する状況を作ることにあるが、この状況を通して、それぞれの語学教育の内容を充実させること、大学の外国語教育の本旨である国際理解を深めることに貢献するのが最終的な目的である。計画の立案は2006年6月末で、9月開講の中国語中級会話コースで実施することが決まり、8月中に相手校北京大学を確定した。9月半ばにICUの漆紅<sup>チーホン</sup>中国語講師が受講生を交えて当日の授業計画を立て、語学教育としての準備が進められた。実施は学期末の11月9日で概要は以下の通りである。

実施日時：2006年11月9日木曜日 日本時間午後4時10分～午後5時20分

参加者：ICU中国語V（中級レベル）の受講生8名と中国人講師1名、北京大学日本語コース（上級レベル）の受講生13名と日本人講師1名\*

教室：ICU—第二教育研究棟301号室、北京大学—早稲田大学北京事務所の一室

授業内容：①ICU 生自己紹介・大学紹介（20 分）⇒②北京大学生自己紹介（20 分）⇒  
③ICU 生 北京大生に質問（中国語）、同回答（中国語）（15 分）⇒  
④北京大学生 ICU 生に質問（日本語）、同回答（日本語）（15 分）

協力者：中国側と日本側のビデオ会議システム技術担当者及びコーディネータ

授業内容の第 3，4 段階で学生同士がお互いに尋ねあった質問の内容は「基督教大学という名前だが、学生は基督教関連の授業をとらなければならないのか、(ICU で中国語を学ぶタイ人の留学生に) 日本語のほかに中国語も学ぶのは混乱しないのか、週にどのぐらい日本語を勉強するのか」のようなものだった（<sup>チーホン</sup>漆紅中国語講師の報告による）。

### ビデオ会議の成果と課題

それぞれの大学の学習環境が第二または第三外国語であることから、学習者が学習言語を使用して同世代の若者と意見交換をする機会は少ない。そのような中で行われたビデオ会議実施の成果は次のようにまとめることができる。

1. 語学教育における成果：相手大学の当該言語母語話者と意思疎通を図るためには、「わかることばで」語らなければならない。その事実は学習者を強く動機付け、担当講師の観察によると語学教育の内容として達成度の高い授業となった。直後アンケートに対し学生は「楽しかった、時間が短かった、また機会があるとよい、自分の中国語のレベルがわかった、語学学習にとって有意義、相手校の学生は nice で嬉しかった」などと述べている。
2. 国際理解教育としての成果：お互いに、それぞれの母語を相手大学の学生が学ぶ動機や日常生活上の好みや趣味について情報交換することで、「人として」また若者同士としての共感や相手文化への発見を体験した。
3. 大学における外国語教育の内容に対するインパクト：語学教育を教室の中に閉じ込めておくのではなく、「母語話者との真のコミュニケーション」の機会を海外の外国語教育の中にあっても具現できた。このような機会が会話の授業の本来の目的であること、この機会を通して学習者に高い動機付けを与えることができることが示され、これは、外国語教育に従事する教師の気づきとなり、教育革新へのインパクトとなった。

学習者、担当講師の両者から、1 度で終わらせるのではなく更に機会を設けたいという感想があったが 1 度きりの「試行」とせず大学教育の体制として教育のシラバスの中に取り込んでいくことが望まれる。今回の試みはビデオ会議設備を備えた相手校と大掛かりな情報技術を必要としたが、この環境は今後世界各国の教育現場で一般的になっていくと予想される。そこで「新奇性」による動機付けの効果が期待できなくなった時点でも、このようなビデオ会議による協同授業を語学および国際理解教育の中に位置づけることが重要である。すなわち学ぶ「中身」として、語学力の向上、当該言語の文化への理解、世界的視野に立った共感や互惠感の形成など、明確な目標を洞察し志向していくことが肝要である。

\*注) 担当は北京大学笈川幸司日本語講師、国際基督教大学漆紅中国語講師の 2 名である。